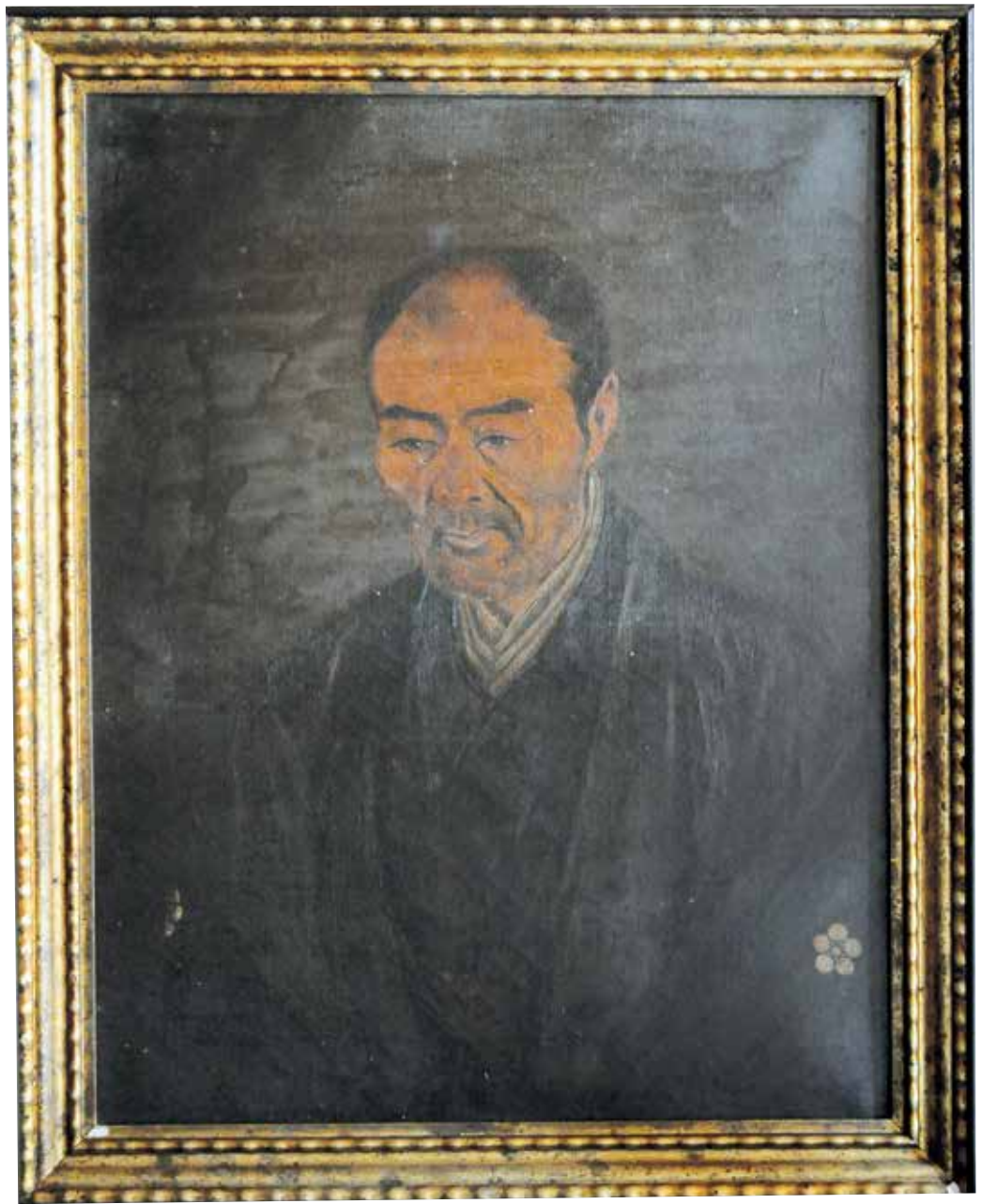


2枚目となる 高橋由一の油彩画発見



本市で2枚目となる、日本で最初の洋画家とされる高橋由一が描いた油彩の肖像画が、市内の民家で見つかり、3月28日に寄贈されました。

2枚目の肖像画発見の経過

平成22年10月に高橋由一が描いた肖像画「第11代山田荘左衛門顕善像」（中野市所蔵）が、（仮称）山田家資料館の収蔵資料整理中に発見されました。

発見の際に、当時の記録から肖像画は2枚描かれていたことが分かりました。

今回、平成22年10月に発見された肖像画とよく似た肖像画が市内の民家で発見されま

した。

高橋由一研究の第一人者である東京藝術大学大学院の木島隆康教授と東京藝術大学大学美術館の古田亮准教授の両氏による評価の結果、肖像画は由一の作品であることが確認されました。

発見された肖像画は、「貴重な文化財として、永く後世に伝えてほしい」との所蔵者の意向により、市に寄贈していただきました。

発見された肖像画について

今回発見された肖像画は、明治16（1883）年に制作されました。大きさは1枚目とほぼ同じです。

1枚目の顕善像と比べる





と、ポーズはほぼ同じですが、やや正面を向いています。木島隆康教授によると、作品を短時間で仕上げるといふ、由一作品の多くにみられる特徴が、1枚目の作品に比べて顕著に認められるということ。また、古田亮准教授は、像主である顕善が由一に2点の肖像を依頼し、その過程や制作費についても記録が残され

今回発見された油彩画

ジャンル 油彩画
制作年代 明治16 (1883) 年
サイズ 縦約62cm 横約50cm(額を含む)
作者名 高橋由一

平成22年10月に発見された油彩画(修復後)

ジャンル 油彩画
制作年代 明治16 (1883) 年
サイズ 縦約62cm 横約50cm(額を含む)
作者名 高橋由一



▲報道機関発表の様子

市教育委員会では、寄贈された本作品に必要な修復などを施した後、一般に公開したいと考えています。

肖像画の今後について

ていることは、全国的にも他に例がなく貴重であると指摘しています。

日本最初の洋画家 高橋由一とは

高橋由一(1828〜94年)は、本格的な油絵技法を習得し、日本で最初の「洋画家」といわれます。

由一は、佐野藩江戸藩邸に生まれ、幼少のころから日本画(狩野派、北宗画)を学びますが、幕末に西洋石版画に強い衝撃を受けて洋画の研究を志します。

文久2(1862)年に幕府が設置する洋書調所の画学局に入局し、洋画家の川上冬崖(1827〜81年)に師事します。本格的に油彩を学ぶことができたのは、慶応2(1866)年、当時横浜に住んでいたイギリス人チャールズ・ワグマン(1831年〜91年)に師事したときで、翌年にはパリ万国博覧会に出展しています。

明治維新後には画塾である天絵学舎を創設し、原田直次郎や高橋源吉ら多くの弟子を養成しました。

由一の作品には、人物、風景などありますが、代表作の筆頭に挙げられる作品として『蛙』(東京藝術大学大学美術館所蔵、重要文化財)があります。

第11代 山田庄左衛門顕善とは

第11代山田庄左衛門顕善(1821〜85年)は、8代山田庄左衛門顕濟の四男として生まれます。20代から30代までを江戸で過ごし、万延元(1860)年に分家して山田理兵衛と改名しました。

その後、病弱であった兄9代庄左衛門顕義の代理として地域の諸問題に奔走しますが、明治5(1872)年に急死した甥10代庄左衛門顕仁の跡を受けて、本家に復籍して11代庄左衛門顕善を名乗ります。

明治維新後は、地域の公職を歴任しますが、明治14(1881)年、相続人を甥の熊太郎(後の12代庄左衛門)に定めて後事を託します。

明治16(1883)年に上京した際、高橋由一に肖像画2枚の制作を依頼し、油彩画代金40円40銭を支払っています。明治18(1885)年、東京浅草に新居を購入して転居し、その直後に亡くなりました。

問い合わせ先

教育委員会事務局生涯学習課
文化財係(豊田支所内)
☎(38)3112(内線542)